

【  
タ  
イ  
ト  
ル  
】

慰  
霊  
の  
日

【登場人物一覧】

花蓮（かれん）	17	高校三年生
柳（りゅう）	22	大学四年生
花蓮の母		
柳の父		
大学職員		
バスの運転手		

【概要】

受験の下見のため神戸大学を訪れた花蓮（17）は、道に迷っていたところ同大学四年生の柳（22）に助けられる。同じ四国出身と分かった二人は意気投合するが、柳の言動はどこか不思議で：：花蓮が違和感を抱いたその時、地響きが聞こえ、花蓮は二十九年前の凄惨な光景を見る。元の世界に戻った花蓮は今日が阪神淡路大震災の日と知る。慰霊献花式に参加した花蓮は銘飯に柳の名前を見つける。花蓮は柳の無念に思いを馳せ防災を誓う。

掃除機をかける音。

床を踏む度に、床板が派手に軋む。

花蓮の母「花蓮、おはよう」

花蓮（17）「お母さん、朝から大掃除？」

花蓮の母「もうすぐ建築士さんがみえるのよ」

食事をする音。お茶を注ぐ音。

花蓮の母「押入れや床下まで診て下さるって

言うから少しは片付けておこうと思ってね」

花蓮「5年ぐらい前にもそんな話してたよね、

確か……何診断だったけ」

花蓮の母「耐震診断。あの時はおばあちゃん  
の具合が悪かったから結局お断りしたのよ」

花蓮「そうだった、じゃあ今度こそ診てもら  
えて安心だね、ウチの家、かなり古いから」

花蓮の母「そう……なんだけどね」

花蓮「何か問題あるの？」

花蓮の母「結構大掛かりな工事になるらしい

のよ。市の補助を受けられても百万円以上かかるだろうって」

花蓮「そんなに」

花蓮の母「今年は花蓮の大学受験と重なるし、まして県外進学となるとね……診断はしてもらっても、工事は別の機会になるかしら」

花蓮「……なんかゴメン」

花蓮の母「花蓮が気にすることないのよ。今は目の前の受験に集中しなさい」

花蓮「……うん」

花蓮の母「花蓮、バスの時間は？」

花蓮「本当だ、ごちそうさま」

花蓮の母「気をつけてね、着いたら電話して」  
花蓮「分かった！」

徳島発・神戸行き高速バスの車内アナウンスが流れる。

花蓮 M 「二日前に受けた大学共通テストの結果、神戸大学を受験することになった私。

受験の下見のため朝早く自宅のある徳島を  
出発し、バスを乗り継ぎ、昼前には神戸大  
学に到着……のはずだったが

神戸市バスの車内アナウンスが流れる。

花蓮「すみません、降ります！」

バスの階段を降りる音。

花蓮「あれ？　ここって鶴甲キャンパス？

どうしよう……間違えた」

柳（22）「あもう、大丈夫ですか？」

坂道を軽快に歩く音。

花蓮「ありがとうございます、助かります」

柳「いえいえ、これぐらい」

花蓮「私、森花蓮といいます」

柳「僕は柳です」

花蓮「リュ……？」

柳「柳やなぎと一文字で書いてリュウと読みます」

息があがってくる。

花蓮「けっこう……山の中にあるんですね」

柳「大学に通うことを登山と呼んでいます」

花蓮「登山……これじゃ地元と変わらない」

柳「もしかして、徳島出身ですか？」

花蓮「どうして分かったんですか？」

柳「バスで日帰りとなると徳島かなと。ちな

みに僕は香川出身です」

花蓮「同じ四国出身！心強いです。そうだ

柳さん、一つ質問してもいいですか？」

柳「どうぞ」

花蓮「工学部って勉強、大変ですか？」

柳「そうですね、とにかくレポート提出が多  
くて、学期末は手が真っ黒になりますよ」

花蓮「……柳さん、まさかの手書き？」

柳「試験前はコピー機に行列ができます」

花蓮「コピー機……写真じゃなくて？」

花蓮M「私は憧れの神戸大学に通う柳さんを質問攻めにした。柳さんは何でも答えてくれた。ただ柳さんはどこか不思議で……」

足を止め、深呼吸する。

柳「この辺りは夜景も綺麗ですよ」

花蓮「本当ですか？ 私、絶対また見にきます！ まずは勉強、頑張らないと」

風が強く吹く。

柳「冷えてきました、急ぎましょう」

花蓮「はっ私、自分のことに夢中で。柳さん、誰かと待ち合わせだったんじゃないですか」

柳「いえ、僕は父を……」

花蓮「お父さん？」

柳「父が初めて神戸に来るので」

花蓮「息をのんで」……柳さんって、すごく大切にされてるんですね」

柳「え？」

花蓮「私の母は絶対、私の大学に来てくれな  
いと思います。今日だって交通費がもった  
いないから一人で下見に行つてねって」

柳「微笑ましく」信頼されてるんですよ」

花蓮「放任です。合格しても入学手続きも下  
宿探しも一人でやってねって言われそうで」

柳「下宿探しも……」

花蓮「そうだ、お勧めの学生寮とかつてあり  
ますか？ 私、住む所にこだわらないんで、  
できるだけ家賃の安い所で」

柳「住む所はちゃんと選んだ方がいいです」

花蓮「そうなんですけど、うちの家……片親  
なんです……母に負担をかけられなくて」

柳「……分かります」

花蓮「え？」

柳「僕も父に負担をかけたくなかった。だけ  
ど……こんなことになるぐらいなら」

ゴゴゴゴと地響きが聞こえる。

轟音のあと、静まりかえる。

花蓮 「こ、これは（絶句）……街が……家が」

瓦礫の中から、か細いうめき声。

花蓮 「りゅ、柳さん、どこですか？ 柳さん」

うめき声は小さくなっていく。

ガヤガヤと群衆の声。

和やかに語り合っている。

花蓮 「安堵して」戻ってきた……」

汽笛が鳴る。

花蓮 「この音は？」

職員 「十二時半を知らせる船の汽笛です」

花蓮 「船の汽笛？ いつも鳴るんですか？」  
職員 「いいえ、今日は特別な日ですから」

「黙とう」の合図。

花蓮 M 「なぜ気づかなかったんだろう、なぜ  
無関心だったんだろう：：私はようやく今日が  
阪神淡路大震災の起きた日だと知った」

小雨が降り始める。

花蓮 M 「一人の高齢の男性が、いつまでも慰  
霊碑に語りかけていた」

柳の父 「：：すまなかつたな、今まで来られ  
なくて：：お前にあわせる顔がなくてな：  
：なぜ、もう少し頑丈なアパートを選んで  
やらなかったのか：：（声が詰まる）」

花蓮 M 「銘板に刻まれた名前は、柳と書いて

一文字で……柳さんはここに眠っていた」

「お元気で」「また来年もお会いしましょう」と別れの挨拶をかわす遺族達。

雨は本降りになる。

花蓮 M 「一九九五年一月十七日に発生した阪神淡路大震災で、神戸大学の学生三十九名と教職員二名の計四十一名が命を落とした。その多くが家屋倒壊や火災によるものだった。忘れてはいけない……忘れたくない……私達と同じように希望を抱いて入学した先輩達がある日突然、未来を奪われことを」

職員 「バスでお帰りの方は、そのまま正門前バス停にお進みください」

バスが到着し、扉が開く。

バスの階段を上ろうとして、止まる。

運転手「お客さん、乗らないんですか？」

花蓮「私……すみません、次のバスにします」

扉が閉まり、バスが走り去る。

電話の呼び出し音。

花蓮「もしもしお母さん」

花蓮の母「花蓮、無事に着いたの？」

花蓮「あのね、お母さん……やっぱり、耐震

補強工事してもらおう」

花蓮の母「どうしたの花蓮」

花蓮「一日も早くしてもらおう」

花蓮の母「言ったでしょ、工事は次の機会に」

花蓮「死んじゃったら次の機会なんて無いん

だよ！私、大学入ったらアルバイトする

から、少しでも工事費用を抑える方法ない

か調べるから。だから、ちゃんと備えよう。

命より大事なものなんてないんだから」

【終】

【参考文献】

神戸大学公式チャンネル（YouTube）

「震災から28年」神戸大学震災慰霊献花式

神戸大学ニュースネット

特集 神戸大学四十四人への追悼手記